

京都・平安京跡左京三条三坊十五町

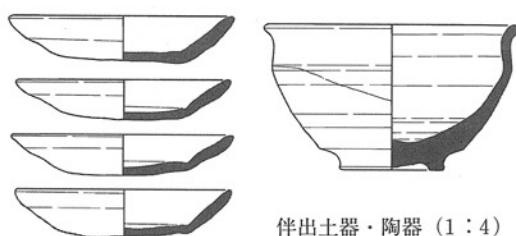
- | | | | |
|---|---|---------------|---------------------|
| 2 | 1 | 所在 | 京都市中京区船屋町ほか |
| 5 | 4 | 調査期間 | 一九九五年（平7）三月 |
| 6 | 3 | 発掘機関 | 関西文化財調査会 |
| 7 | 2 | 調査担当者 | 吉川義彦 |
| 6 | 1 | 遺跡の種類 | 都市遺跡・都城跡（里内裏） |
| 5 | 4 | 遺跡の年代 | 平安時代～江戸時代 |
| 4 | 3 | 調査地 | 平安京左京三条三坊十五町に相当 |
| 3 | 2 | 調査地 | 世紀には三条坊門内裏、別名押小路殿とも |
| 2 | 1 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 調査地は平安京左京三条三坊十五町に相当 |

よみたん

も言われる里内裏が存在した。中世後半の実態は不明だが、中世終末になり遺物や遺構が確認できるようになる。江戸時代の文献『京雀後追』などには、調査地付近に「うるしや」「さかなくわしや」があつたと記されているが、文献の年代と出土した遺物の年代、内

7	6	5	4
遺跡の種類	都市遺跡・都城跡（里）	調査担当者	吉川義彦
遺跡の年代	平安時代～江戸時代		
遺跡及び木簡出土遺構の概要			

容に矛盾はない。特に木簡の出土している
土坑からは、江戸時代前半～中頃の遺物が
出土しており、文献との関連性から近世京
都の実態を解明する上で貴重な資料である。
なお一八世紀には「大丸」の本店が調査地
に存在した。



伴出土器·陶器 (1:4)

木簡は中世以来の上京・下京に対し、近世に発達する中京から出土している。木簡が出土した場所は西押小路町・塗師屋町・舟屋町の境界にあたり、京の町の構造から空閑地に相当する。町境の空閑地は、壁土などの建築資材の採集地やゴミ捨て場としても利用されていることが、過去の京内の調査で判明している。

今回の調査で検出した土坑は、壁土の採集を繰り返した結果、池の大きな窪地ができ、その窪みにゴミを投棄した遺構である。木簡は文字が判読できないものを含め、一二点出土した。出土遺構は最大のゴミ捨て穴（S X-二二）で、約九〇〇 m^2 、深さ〇・五一~一〇mの規模である。木簡はすべてこの土坑から出土した。木簡には土師器、唐津・瀬戸・美濃・明の染付などの陶磁器類、キセル・飴金具・錢貨などの金属製品、漆器・家具調度品の破片などの木製品

漆製品製作用の工具、金属製品製作用の工具、植物の種子、動物と魚の骨など、大量の遺物が伴っている。「ミ捨て穴の遺物の年代はXI期（小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」（財）京都市埋蔵文化財研究所「研究紀要」三一九九四年参照）の土師器（図版参照）が出土しているので、一七世紀の中頃と考える」とができる。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「▽○一郎〔兵カ〕殿参」
・「▽○餅〔米カ〕五斗入」
127×18.9×4.2 033
- (2) 「▽小□五ヶ入 □□入」
109×26×2.8 032
- (3) 「▽□□□ 大つかや□」
(107)×21×5.2 039
- (4) 「▽ 柴山助三郎殿
・「▽春日〔町カ〕」
(101)×17.5×3.6 039
- (5) 「みのや せい三郎様
・「み〔そカ〕つけ大こん〔三カ〕」
・「み〔そカ〕つけ大こん〔三カ〕」
・「ほし〔くカ〕り卅五〔くカ〕」
(106.5)×22×3.8 019
- (6) 「▽久左行 十一〔内カ〕」
230×20×3.9 032
- (7) 「▽ 当座塙鷹壱〔駒カ〕
太郎左衛門」
151×38×5.5 032
- (8) 「▽▽□□屋 □郎右衛門」
(143)×27×6.9 039
- (9) 「▽五百文なます」
・「▽● 五郎衛門」
〔黒点〕
〔志カ〕
〔るカ〕
「あめ」
170×26×6.9 033
径69×厚4.9 061
- (10) 「▽□□□」
137×18×4.1 032
- (11) 「▽ □□□」
(87)×14.5×2.5 019
- (12) 「三月十四日」
111×26×5.1 051
- (13) 「六右衛門」
・「むね□五□」
104.5×28×3.3 051
- (14) 「○□□」
・「○ □□□」
110×27×5.5 011
- (15) 「□□□郎兵く殿」
「□□与右衛門」

（墨線）
・「一□庄□□□」

・「太郎右衛門」

・「□□建右衛門」

・「大うめ十□□□」

・「うめほし」

・「七月竹□」

・「□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

・「□□□」

(6)の「行」はあるいは「衛門」か。(10)は曲物か壺の蓋に墨書きしたもので、「る」はあるいは「な」か。(16)の「庄」は「座」の可能性もある。

164×25×4.6 051

170×23.5×4.2 051

木簡は杣田善雄・横田冬彦、西山良平の三氏に积文を作成して、ただいた。図版は写真ではなく赤外線スキャナーを使用して、八〇〇 dpiで原寸で取り込んだデータである。画像データ入力は(財)京都市埋蔵文化財研究所の宮原健吾氏にお願いした。

9 関係文献

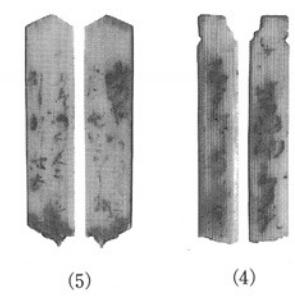
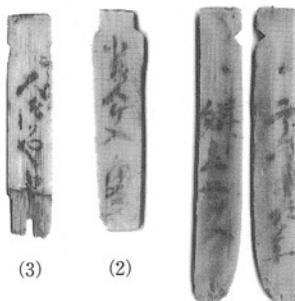
関西文化財調査会『平安京左京二条二坊十五町発掘調査報告』
(一九九九年)

(吉川義彦)

156×29.5×5.1 011

145×20×4.8 011

189×24×3.8 051



1998年出土の木簡

